始

昭和十二年度東大講義

哲學概論

伊藤吉之助教授講述

〔第一分册〕

東京プリント刊行會版

昭和十二年度東大講義

哲學概論

伊藤吉之助教授講述

〔第一分册〕

東京プリント刊行會版

338
1292

HF 226
108

哲學概論

目次

緒言 …… 5
第一. 認識論に於ける客觀主義 …… 28
第二. 認識論に於ける主觀主義 …… 78

帝國圖書館藏

哲學概論

1) Cohen, Herm: Kant's Theorie der Erfahrung Berl. 1885.

" " : "Ein Buch über Kant." Die Nation. 1899 nos 43 44

" " : Die systematischen Begriffe in Kant's vorkritischen Schriften nach ihrem Verhältniss zum kritischen Idealismus Berl., 1873; ib. 1874, pp 38

" " : "Kant's Begründung der Ethik" ib. 1877.

" " : Von Kant's Einfluss auf die deutsche Kultur" ib. 1883 pp. 38

2) Lask. : Die Lehre vom Urteil Tüb Mohr., 1912.

3) Bauch. Bruno: Immannel Kant (2 unveränderte Aufl.)

" " : Geschichte der Philosophie

4) Husserl. Edmund. Ideen zu einer

reinen Phänomenologie und phänomenologische Philosophie. Halle, Niemeyer 1928.

5) Hartmann, E. v.; Das Ding an sich und seine Beschaffenheit: Kantische Studiem zur Erkenntnisstheorie und Metaphysik Berl 1871

" " ; "Neukantianismus, Schopenhauerianismus und Hegelianismus." Philos. Monatsh., XIV. 1878. pp. 99-105 etc

6) Rickert, Heinrich: Der Gegenstand der Erkenntnis

" " ; Einführung in die Transzendental Phelosophie

7) Wagner, Rudolph; Der Kampf um die Seele vom Standpunkt des Wissenschaft ..... Göt., Dieterisch 1857

8) Bolzano, Bern(h)ard, Selbstbiographie mit Einleitung ..... Wien, Braumüller 1875.

9) Scheler, Max Ferdinand. Schriften zur Soziologie und Weltauschauungslehre

1923.

10) Diethey, Wilhelm. Einleitung in die Geisteswissenschaften Versuch einer Grundlegung für das Studien der Geselischaft und Geschichte. Leip und Berl. Teubner 1923.

11) Jaspers, Karl. Allgemeine Psychologie für Studierende Berl. Springer 1923

緒　言

哲學概論の意味：

哲學概論には多くの意味がある。一通に哲學史をやつた人は一応試みるがうまく行かない。この講義は哲學原論——とまで行かないでも——それをやりうとする。則ち哲學の自己理解である。その意味でこの概論をやりたい。この意味なればその他の多くの語で表現出来る。例へば「哲學」でも表せる。で結局「哲學概論」と云ふのは「哲學とは何ぞや」と云ふ問に対しての答へ方に多くあるに従つて、多くの概論があるのである。前に述べた様に哲學と哲學史の関係は結局「史」を材としての何者か哲學を把み出す事であり、その方法にも多くある。例へばTypenlehreの場合は世界観の意味の一つの見方で、世界をTypeに分ち、それから「哲學とは何ぞや」に答へやうとするのである。

又自己の哲學を基とし過去の哲學に対して態度を取る（behave する事、則ち批評を実行することなり）その中に「哲學とは何ぞや」と云ふ事に述べようとする。（又は自己の哲學をハッキリさする態

度である）「史」を材料としてもその態度は上述のものゝみでなくHegelの如くそれを自己の哲学のMomentとし、Wahrheitの一側面と考へようとすることも出来る。多くの場合概論と史とは関係づけられる。又、之を初歩的にすれば哲学者の思想の解説をし、それをsystematischに部分に分ち、その中で哲学者の立場を解説的に明らかにして哲学を知らんとする事も出来る。で多くの場合には「哲学とは何ぞや」と云ふ問に対しては「史」と何等かの関係を以って答へるであらう。勿論自己の哲学から哲学に態度する（sich gebaren）こともよいのではあるが、普通には之は云ふまい。全く正史的事実からは分つ事は出来ない。そこで此処でも上述の如くphilosophein（φιλοσοφεῖν）の反省にしても、然しやはりその反省されるものは正史的なものとの関聯に於て反省されるので、それでなくてはobjektivの見解を展開する事は出来ない。その中にも目標に対する自己の位置必なければかゝるものは出来ない。そこで目標とこ

位置決定の必要

ちらの立つ位置は予め明かにしなければならない。そしてその立つ位置の展開が論を読く人の傾向になる。而してその途中で哲学

的にはたらく。（その働らくのは史的材料でも哲学的材料でもかまはない。）然来この進み方に種々ある。例へば観念論があるが、之は今日評判が悪い。又唯物論もあまり歓迎されない。で唯神論や唯物論と云ったものでなく、自己の立場から進んで見る。「それには位置を定める必要があるが、その位置は何か」と云ふ様な悩みが起るとする。位置は予め分ってゐなければならぬ。と云って明瞭な（既に定ってゐる）立場からゆく事は目標を定めてゐる。動いてはゐるが分ってゐると云ふ事になる。「位置」はこの意味で此の場合は云はない。而して立場は一時的に分けられることも出来やう。例へばschellingの如く東西南北に分って、福岡目標は中心にあると考へるのも立場を分限する見方の一つである。が、かゝる意味で予め何処へ行くか分る様な立場をとる事はある側面しか把握出来ない事になる。中心は遠く広くと必定められてゐる。と云ふ事になる。然しこゝでは、かゝる意味の位置を定めるのではない。むしろ之でなく出発点として把へる所の、云はゞphilosophein（φιλοσοφεῖν）する手がかりを如何に把握するかと云ふ事である。例へば、はじめから超絶的（内容

ば空虚でも）をありとして之を哲学的思惟で明かにするとする。此の場合の手がゝりは絶体者である。又日常生活に副近たものだ様って、之が若し絶体的なものでなくても之から絶体者を見出さうとしたりする。つまり「手がゝり」を何処に取るか」端緒）之が位置と云ふ事である。（之は本当の意味ではないが。）つまり、手がゝりを求め、その取り方によって或は直ちに形而上学的問題にぶつかる事もあらうし、又認識を手がゝりにすれば、認識論なものを手がゝりにする事になる。で、此処で位置を代かて目標に向ふのだが、此の位置とはIsm的な立場ではなく及者により或る立場から立って見ると云ふ事である。或るIsmを真と信ずる人ならばよいが信ぜぬ人は反対の立場に立って見ると云った哲学的思惟の法もあり得るので、此の講義もその態度に成る。則ち及者の観点に立ればよいのであるが、かゝる語は稍いて常に哲学的な真に向ふ、換言すれば自己理解をしてゆくのである。従って必要なのは資料であるが、その手がかりになるものを如何に考へるかと考へる。つまり或る哲学者の思惟そのものを問題として、それ

を及者する。而してそれに依って全体的に云って哲学自身の自己及者が出来やう。近頃で傾向の問題は何かと云ふと「存在は何か」と云ふことであって、則ち存在論であるが、その場合手掛りになるのは存在そのものであり、その場合存在そのものについての或人の哲学的思惟は如何であるか、その思惟は内面的経験を含んでゐるか、又他との関係はどうであるかと云ふ問題を考へる。それ故にその人の思惟を信ずれば問題はないが、信じられない者は反抗する。而して存在そのものと云ひながら実はその一面しか視ない事が分った場合、他の人に就いて考へると云った具合として、具体的にはよい様である。が「存在」の如き場合には多くの考へ方が出来ると思ふ。例へば、存在の問題を手がゝりとする場合、今日の流行的な、又Generationにappealするもの、例へば独語の"Sein"で表はすの問題となる。このInfinitiveの表す思想は本来流動的である。丁度Neo-Kant学派の流行したとき"Denken"を考へたが、之は「思惟運動」である。又はpsychologischなBewusstseinのものでなくλόγοσのBewegungを表さうとしたものである。

この"Sein"はその目標は「もの」(則ち Ding 又は res で表はされる)で、その根本になるのは substantia である。かゝる意味に於ける存在は永久不変の意味で substantia と云ふのは res で死物であり、動かぬものであり、或る因果関係に従って動く。かゝるものの見方が拡大されて人間をも総て"res"と見られるが、之に反対しやうとするのが、その説の大きな目的である。そこで之迄の存在に対する哲学者の考へを打破しようとするのである。また動くものでも空気、水の様なものならば因果的であるから res であるが、かゝるものでなく、動くものを考へてその意味を活用しようとするのである。つまり Ontologie が存在を唱へる一見地である。之に対しそれ以前の立場又、今日の ontologisch の立場は総てこの道にゆく。然し今日「動く」意味の「存在」を根本的の存在とする立場は従来の静的の立場に立つ哲学をも指し得るか否か ontologisch に云へば、之は res 的に見てゐると云ふが、他の立場からすれば(例へば史的に見ても)かゝるものゝみでなく、物のみの存在でも動くものゝ存在でもなく、第三の領域がある。故にこゝで全体的に見なければ、

完全な Ontologie ではない。例へば(分り易く云へば)今日の存在論の人々は、存在を「動くもの」的に見、従来の哲学者は物的に見てゐるのが、多くあるが、その他にも存在がある。

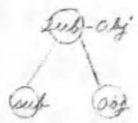
Wertsein 例へば Wertsein(価値存在)もある。史的にもこの事があると云って上の二つに反対する。価値は物ではない。然し Wert を res 的に考へる事は出来ないが、之に対し、又或る程 Wert は物と区別されるが Wertsein の考へそのものが、自己同一的客観的である。勿論 Wert の自己同一性は認めなければならないが、自己同一的に云ふ限りにおいて表面は違ってゐる様に見える。斯の如く見える様は程度的なものでなくても根本に於ては階層程度的であると云へる。勿論 Sein 論は多くの Probleme を提出する事が出来やう。Copular の"Sein"も自然に引き込まれやう。しかしその各々が各々の存在(Sein)である。それ故に一色では塗りつぶせぬ。若し全体を包む Sein があるとすれば、それは空虚でなければならない。つまり copular にならねばならぬ。以上は手摺りの一例を云ったのであって、かくの如く多くの手摺りがあり得るのである。之が出発点としてこれとい

ハやう。今 real の存在(Sein)又時間(Zeit)と云った事が問題となってゆく。つまりかゝる立場から之までの Sein を扱った時、次のものを空間的存在を與へるのと同じになる。勿論 real な存在(Sein)も空間的意味を有してゐるが、かゝる一例もある。此の場合にも哲学的思惟作用の過程として当然出来る問題であるが、先づ手掛りとしてとらへるのは、こゝまで philosophieren の過程としてその前の問題、手掛りからはじめたい。それは我々に一番親れてゐるのは普通何か哲学的に考へる時れる Subjektiv-objektiv の関係で之が最初の問題であらう。

Subjekt と Objekt:

この両者(Subjekt と Objekt)は認識関係に用ひられ而も言ては唯一の問題であった。そしてその為にそれ以前の Metaphysik が哲学の外に追はれ Erkenntniß Theorie の問題のみが重んじられた。しかし Metaphysik にしても Subjekt と Objekt の問題は考へてゐる。すると多くの Ism はこの関係の何れかの側面を説くかによって決すると云へる。その一番簡単な形は Subjekt

Objekt の何れか一方を他に吸收させるのである。然し哲学ではそれ程簡単にはゆかない。そこで両者の間に多くの出入がある。



例へば左の如く Subjekt と Objekt をむすびつける Subjekt-Objekt と云ふ第三者を考へて之に依って結合されるとする。然らば、その第三者とは何か。それは多くの場合 Subjekt と Objekt の出入の関係になる。然しその意味する所は Subjekt でもなく Objekt でもなく、又 Objekt でもあり、Subjekt でもあると云はれる。然し実際の交渉に於ては何れか一方が一段高い形に於て他を引込み、吐き出し又吸ひ込んでゆくのである。さうすれば一方が優位 であれば Subjekt = Objekt はそのものの絶対化したものになってくる。(Subjekt に優位を與へれば Sub-Obj- は Subjekt の絶体化となるの意)故に口では何れにも偏さぬと云ってもよく省すれば何れかゞ持上って来る。たゞ第三者を考へる時にも之を認識関係的に考へるか ontologisch に考へるかに依って Subjekt-Objekt には相異がある。認識論的なら厳密的になり ontologisch に考へれば Sein の原理になってしまふ。

此処に相異がある。例へば Subjekt には Form をあて、Objekt には materia をあてて Subjekt-Objekt を求めるこの傳統的のものは Form と materia の統一とは云ふものゝ Subjekt に優位を與へる事になる。勿論 Subjekt の Seite が Form で Objekt の側が materia であると云ふ時も左様であるが、之を斯く明らに云はぬ場合に於てもかく考へられる。則ち Form を認めぬわけにはゆかないので、materia 自身の中にも Form を認め、Form の中にも materia を認め、その両者を如何に考へるかと云ふと、かく両者は同じであるから、その Subjekt-Objekt に於て一つの Form が両者を規定したとき、それはもはや Subjekt でも Objekt でもないと規定出来るが、一体同じ Form が或る時には Subjekt として成立し、或時は Objekt として成立するとすると、その materia が異るとしなければならない。するとこゝに materia の分科に就いて考へなければならない。でかゝる余計なものを考へない為めに同じ Form の Funktion (作用) が異る。之に依って対立するものゝ構成を考へる。しかし Form が然らば徹底的に同じ Form かと疑へよう。この場合 Subjekt

に作用するときは A に作用し Objekt に作用する時は B に作用するが Subjekt の A 作用は複雑で、之は Objekt の内部と一は質的に異ると考へる為に之が同じ作用をする同じものとしても Objekt の作用と Subjekt の作用とを比較すると Subjekt の方が複雑であるのである場合は複雑なものが Subjekt の作用全体で、その一部が Objekt の作用である事もある。そこでどうしても Subjekt-Objekt は Subjekt の拵上ったもの、則ち絶体化と云ふ事も考へられる。そこで Subjekt, Objekt は結局認識的なものであるが、之は可成り複雑な事も含んでゐる。しかし、認識問題は之に満足してゐるのもあるが、結局存在としての意味がなければならぬ。故に之が関係の一部となって、結局存在関係になる事が望ましいのである。そこで問題は哲学的の思索が複雑になるのだと思ふ。その関係の中には之までの存在は物的に考へてゐると云ふ考へ方をすることを排するときに第三者が生ずるとしても、之は前の存在に入るので、存在関係の Subjekt と Objekt になる。であるから、動いてゐる存在にはどうしても Subjekt を基としなければならない。Objekt は死物である。で之から進ん

だ存在関係も考へられ、或は又総ての存在は実体であると云ふ考へ(Spinoza)もあり得る。この単に動かぬ事でも natura 的の場合でも(natura)を生物と考へられるが、今の Ontologie からすれば不徹底である。それ故に Ontologie からすれば動的の存在を Subjekt としなければならぬ。之に対するものは Objekt である。之は哲学的に考へる方向であるが、それは最初に何かに向はうとするのが常態で両方が持ち上るのではなく、それは何か両面的矛盾を出す事が多い。そこでどうしてもうまく少かない。然し両者を持ち上げたらよからうが、之が出来れば問題はないので、この時に云ふべき事は絶対者を一者として把へんとする要求がある。之と両方を持ち上げる(之には ousia と rōsjua 二つの考へ方があるが、かく考へる)時その一者を如何に考へるか、と云ふ事でかゝる様式に持ち上る事が、うまくゆくか否か問題である。しかし Implication → Explication にする事もある。(Hegel も之に入ったものである。)この意味はかくの如く進んでゆく間に多くのものを入れその中に規定してゆくのをはじめ多くのものを含んだのがあって、それから出してゆくと云ふ事で、

之を逆に云へばそれを次第に最后のものにおさめてゆく。之が consequent にゆけばよいが、之がよくゆかぬ事が多い。途中から捨ふのは哲学的にも一度考へねばならぬ。途中から捨ふのは自己を

Subjekt. Objekt の優位の問題

具体化するために多くのものを捨ふので、之は別の問題であるからここでは省く。然し今日では実際に於ては何れか優位に立つので、その何れにも関らぬ為めに何れかに傾いてゐて、両方とも持ち上る事は成功しない。そこでかゝるものは一面 mystisch の考へを入れねばいけないと云へう。そこで我々の問題はかゝる考へ方に如何に態度すべきか、その反省が必要である。自分はかゝる考へ方の解決の方法は一つしかあるまいと思ふ。

哲学概論は哲学とは何ぞやの問に答へる事を任務とする。哲学の本質に就いて解明することを目的とする。然し斯様な哲学の本質に就いて問に答へようとする様な場合、我々は既に哲学の中に動いてゐなければならない。即ち斯様な答自身が哲学的な問である。(之に対する問が之れ自身であるから。)多くの哲学について哲学の真の本質は

最后に至って始めて明かにされるのも之に基因するのである。斯様に哲学の本質を問　て，之に答へるのは哲学の自己理解である。即ち哲学しつゝ自らを明らかにする事である。例へば Heidegger が形而上学とは何ぞや，と云ふ問に答へる為めに形而上学の一問題を取上げて形而上学の問題を明かにしようとした如き，又　　の Philosophie に於て哲学は夫々自己の概念を作る，哲学は自己に就いての何等の見解をも持たぬ，哲学とは何ぞや，と云ふ事は自ら哲学に至る事に依ってのみ知られると云った如きはその良い例である。所で哲学するものは則ち人間であるから哲学しつゝ自らを明白にする事，即ち哲学の自己理解は哲学する人間の理解である，自己理解でなければならぬ。一般に哲学的要求は人間に特有なものとして或は人間を Animal metaphisicum と名つけて他々の生物と区別し或は又形而上学は人間存在として生成すると云ふ事は同一であると考へられる様に人間そのものゝ本質的構造に基くのである。人間が人間として存在する，而も常に自覚的存在と云はれる。人間の自覚的存在とは，一般的形而上的に存在しつゝ自己の存在に関心して存在する

と規定されてゐる。斯様な関心的自覚的存在はそれ自身他と離れた個立的存在としては時間的に存在し得ない。之を断く決する他者又は否定者との関係に於てのみ自覚的に存在し得るが故に，時間的に存在しようと云ふ事は人間存在が必然的に自己との分裂の間に動いてゐると云ふ根本構造に基くのである。斯様な自他の分離の間に動く関係は関心とか，その他の関係によって規定されるが，人間が人間として存在する限り　斯様な動きは表はれることなく，それは人間が死んだ事でなければならぬ。

自他（主物）分裂の関係を我々は一般的に situation（状勢）と呼ぶことが出来る。situation はこの場合は，我々自身の手によって之を編入する事の出来る場合もあるが，一般的に云った situation 一般を我々は否定し去る事は出来ない。ある situation は此処の situation を越え人間存在を越えて，必然的にむすびついてゐる。例へば　　は斯様な situation を Grentzsituation（限界状態）と呼んでゐる。かゝる situation に哲学的な時間が存在すると云ひ得る。斯様な Grentzsituation は多様な形態上に　　存在し，

又人間の時間的形態も多様であるが故に徹底的には人間の存在すると同じ程度に於て多様である。即ち人間の世界観は無限であると云へる。又同一人間の哲学的時間と云へども永遠に一定したものでなく常に動いてゐると云はねばならぬ。故に客観的に與へられてゐると云ふ意味に於ては philosophia plenis と云ふものは存在しない。若し、かゝる哲学が存在するとすれば永遠に哲学的に動くと云ふ事でなければならぬ。しかし、以上述べた様な人間の自覚としての世界観も或は客観的に考察の立場から上述の見地に基いて根本的な型（Typen）に還元し得る。例へば Scheler は人間の正史に於て、その根は人間学の立場から今日の European Civilization の支配的なものとして人間と人間の存在者としての位置に関する自覚を幾つかの理想的な Typen に還元出来ると考へて次の様な5つの理想型を挙げてゐる。

1) 唯神的な世界に於て支配的である人間の……Idee……宗教的……信仰の理想

2) homosapiens の Idee

3) homo habel の Idee

4) 人間自からを理解する Idee……decaden-

ce の Idee

5) 人間を絶対化する Idee……何願の最高が之と見る所の人間の Idee。

之等は人間本質の把握であるが、これは切離された個立的人間ではなく世界との関係に於ける人間の把握でなければならぬ。実に例へば Dilthey は世界哲学の立場から形而上学の Typen として（Typen der Metaphysik）

第一 Naturalismus

第二. Idealismus der Freiheit

第三. Objektiven Idealismus

と分ち、又 Jaspers は Psychologie der Weltanschauung から Grenzensituation に於てその立場 Typin として次の三つに分つてゐる。

第一 Skeptismus と Nihilismus

第二 das Begrenzte に足場を求めるもの

第三 das Unendliche に足場を求めるもの

とである。人間と世界価値の関係であり、かゝる立場もあり得る。

然し所與から離れてやるのでもないので、他に角一つの見地から哲学を拱び出しそれを体系的に

廻転展開してその展開に就いて云はうとする。それには多くの見地で取られ得る。それ等は内面的には関係はあるが、その事を此処で簡単にのべよう。

即ちKantの最高原則がそれで、之から今日幾つかの哲学が派出してゐる。それは前から云ふ様に出来れば第三のものが述べられゝば、理想的である。それには主観から出発するか、客観から出るかの二つである。Kantの場合にはこのBedingungを意識一般（Bewustsein überhaupt）とするから主観から出てゐるのである。普通は之は認識論的のものであるが、人に依って之はMetaphysikのであるとも云へる。所謂Neo-Kant派はKantの言を正直にとって主観から取り出した解決法を取らうとしたが、后に至っては客観から考へやうとする。

（Neo-Kantismus）そこで、此のNeo-Kant派は独立のものと考へられる。所がKant派のみならず、その他の立場でその原則の解釈が自己の哲学（主観から出てゐる）であるとする者もあり、客観から出た解釈をとるものにはCohen Lask Rauchがある。Lickert等は前者に入る。同じ認識論よ

って出て来た。而もKant派でいふHusserlはやはり主観から出発してゐる。彼のものは著としては出ないがlectureの中にある。現象学者の問題であったが現象学は認識論である。かゝる認識の立場からするのはtranszendierenする。客観からゆくとinconsequentが出るので主観から出発しやうとする。主観から出発しやっとするに認識論として独立に解決出来るかと云ふと、然りでなく何か残る。（Husserlの認めるFinkとHusserl自身とはその解決に於て表現法が異ってゐる）。そこで、又Husserlはneo-Kant派と同じ様に云はれてゐるが、之を区別して明にする為に、その反対の方面を強張する為めにFinkは一見Husserlと異ってゐるやうに見える所がある。所謂Objektivismusには種々のinconsequentのものが残されると思ふが、その中でもHusserlの様な考へから客観的の立場を主張するときinconsequentなのはObjektから抜き出す限り、そのものが如何に現実の存在者の客観と主観を関聯せしめるかと云ふ点にあり、存在者はその形式として考へられる存在、形式存在で最后の存在にはならない。さうでなくても、我々はこの中に則し

てみてもその中に inconsequnt なものを認め得る。世界を Begründen しながら一部を Begründen する事になる。その全体を抜き出して見た場合、その上になければならないのは主観から抜き出したものである。所が主観から抜き出した場合にも存在者の存在が全体として規定されるか。内容も形式も Begründen する世界を Begründen するには世界的でないものに依る事が必要である。それはつまり weltlich の主観から出た、Reduktion（現象学的語　還元）に依って内容形式も基礎付けようとする。勿論その中には自家意識（Selbst-bewustsein）がある。然しかうる考へで存在が規定されるとしても、その意図は雄壮であるが、何か残るものがある。之が則ち認識論へ移る根本である。然しかうる内容形式を超越しても完全に理解は出来ない。すると認識論中に於ては解決出来ない事になる。そこで論内に於ける残った所を処置する事に依って認識論の基礎を備へる事になる。そこで今までは認識論から Metaphysik に移って行ったものが、認識論の根本を Metaphysik に依って基礎付け、その立場からして認識論に少くことになるか、今日のものは

Metaphysik から認識論へ行くのではなく、その上に立ってゐる。則ち認識にしても人間存在の一つであるとしてみると人間存在の全体が先づ問題になると云へる。つまり主、客は認識関係でなく Metaphisik 的になると異った場合を持ち来す事を示す。すると矢張り此処でも Metaphysik として Kant の最高原則を理解する、その立場からも哲学が出来る。Metaphisik に於ても主、客、何れかゝら抜出してゐる。

（Hartmann）客観の方面から出発するものとされてゐるのは N. Hartmann の metaphysische Intologie である。主観から出発してゐる Metaphysik は又は Ontologie は Heidegger である。Heidegger 自身は主観主義（Subjektivismus）と云ふのに反対するかも知れないが、又 Subjektivismus は之より更に subjektiver であり、Objektivismus は之より更に objektiver であると云ふが結局その説は Subjektivismus である。最高原則を彼は Transzendental の本質規定とする。Transzendital は人間を Transzendentalisieren する作用である。之が為めに Horizont を必要として居る。そこでその Grund には主観から出たものが考

へられる。それ故に Subjektivismus である。之に反し Hartmann の方は、はじめ現象学がある。それは日常的経験体系を現象学的に説いた。然しそれは Husserl の Phänomenologie の如くは説かずに両者の釣合の関係から考へてゐる。すると、その何れ（主客）に重きを置くかと云ふ事が考へられねばならぬ。何故ならば計りで釣合へばよいが常に然りとは思へぬ。釣合はぬ時は何れが下るかと云ふと Hartmann によると Objekt が重くなる。つまり主で客を把へんとすればそこに残りが出来ると云ふのである。認識関係に於て両者を考へれば残る。それを Hartmann は前に Neo-klassismus の一つであつた Wagner の如く無限の発展とする。それは Begriff の無限であつたが存在は無限であるが Begriff の中には存在により Begriff が大つてゆく。残るのは Aufgabe であるが、それが実在である。それでは認識とは云へぬと云つた様に何れも Seinendes の発展である。所がかゝる立場は Critique ではその Minimum のものをゆるす。Objekt に対し Subjekt から出発したとき残るものはない事はないが、全体が Subjektiv の色彩で統一される。

かゝる解釈を土台とする。

Hartmann は存在者の Metaphysik であるが Heidegger は存在者に対する存在の Metaphysik であるとする。で普通 Hartmann は Realismus である。かゝる行動で問題が内部的に廻転せんとするのである。

以上の様に人間存在と世界に就いての関係、それに基く自覚としての世界観は幾つかの Typen に分類して之を客観的に考察することは例へば、世界観学とでも云ふ形で取扱へるが、元来我々の目的は自我分裂中に動ける人間の自覚としての自己理解といふ事にあるのであるから、此処では一つの標準により幾つかの與へられた哲学を挙げ、それ等の哲学思索に則して内外的に自らの問題を廻転させて自からを解明する様にしようとする。而して此処に標準として採るものは Kant の綜合判断の最高原則であり、之に基き先づ認識論的見地から始めようとする。蓋し認識論は近世哲学の根本問題、中心問題と考へられてゐたからである。

第一. 認識論に於ける客観主義

近来哲学の復興 XIX 以后に於て所謂 Neo-Kant 学派が主要な役を為したのは何人も否定出来ぬ事である。而してこの Neo-Kant 派の正史的意味の重要なものは Kant に於ける das Transzendental と云ふ概念を認識論的方向に純粋化した事であり、而して Neo-Kant 派の内部の発展はこの das Transzendental を中心として、それの主観主義的理解から客観主義的への発展と云へる。所が到ちく Neo-Kant 学派に於て始め認識論的主観として das Subjektive とが結合されて das Transzendental Subjekt と云ふ概念が確立されたのだがこの先見的主観と云ふ語は理論的価値の純粋理念的妥当とこの価値を結びつけた主観性の機能とを一つにまとめて云ひ表はした語であり、元来の das Transzendental と das Subjektiv は互に要求し全く異った概念ではない。則ち此の das Transzendental を補ふものは寧ろ das Apriori であって das Subjektiv ではない。客観を可能にするものは das Apriori であって主

観ではない。Subjekt は Objekt に対して何処までも相関々係を維持せねばならぬので、Subjekt の優越を主張する事は出来ぬ筈で、主観は客観を可能にする意味を有する das Transzendental は本質的要素である事が出来ぬのであって das Transzendental はむしろ主観客観の相関々係から超越せねばならぬ。この das Transzendental は認識されるが客観も認識する主観も同様に超越するところの論理的価値でなければならぬ。かくの如く das Transzendental が Subjekt, Objekt に共通して超越するが故に両者が相関々係に結ばれるとも云へる。要するに非実在的の客観的な制約としての機能は主観から取除かねばならぬ。換言すればかゝる機能を有するものは主観と云へぬ。一般にかゝる考へから客観主義の方向に徹底しやうとして前述の例へば Cohen や Lask や Bauch を挙げられる。

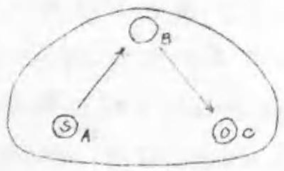
Cohen は例の Erzeug が Erzeugnis であると云ふのだが erzeugen と云ふのは Denken の erzeugen であるとする。之では主観的見たいだが之は Denken は今日の主観的動機を基とするからで之は論理的動きを示すので、これで Denken は主観的でない。

之に対して Bewusstsein と云ふのが考へられる。之は Kategorie として考へられる。之は対象構造の Kategorie でなく文省の Kategorie 又は Metaphysik の Kategorie 自然科学が自ら成産する概念を文省するときの Kategorie として考へられる。対象構造のときは Bewusstsein でない Denken つまり Objekt である。概念の Schöpfer であると考へられる。この内容がせ界の概念になる。対象の概念のみ経験のものを示すのは この対象は Denken であるか、主観的に見えるかを除かんとする。「生産する」とは Kant の語で Begründen する事 Hypothese を與へる事、Kategorie を見出す事」である。そその科学を導する。かく水解決で内容を太らせる事は認識の無限の進展を稜したものでその間に主観的のものが融んでゐる。でこの点不徹底であると云はれる。Lask の場合は Rickert ははじめの第二版までは一つの道を辿つてゐたが、Lask のものに文省されてその逆のものと考へてゐる。この道を考へさせた Lask の客観主義では真理絶対的の真理世界が基準となつて認識の規範として考へられる。

ではじめから対象があつてそれに則るべきであ

り認識は之を破ると云ふ考へ方である。Bauch は欧由将の Kant の最高原則の解釈がある。之れも客観主義は Bauch で徹底されたやうだが前述の如く彼に徹底されると云ふとその間に内部的の Inconsequence がある。

Lask の場合も同様であるが客観が主観から離されてゐるが、その関係がつかなくなる。例へば Lask の時は真に向ふ時、之を打壊せねばならぬ。之は判断をするとき壊して又元の通りにする役とするので、そこで割らなければならぬ。之がなくてはならぬのだが彼 Lask 自身の説では之が出来ない。それで Objektivismus は困難になつて来る。之は Bauch の場合も同じである。又客観主義の一つの古い例では Bolzano の考へ、人間の存在に関係ない真理を云つたが、認識の可能さこの Sinnes は出来なくする。例へば



主観と第三者とあつて主客が一元的ならばよいがさうはゆかないので、AB BC の関係がある意味に於て異つてゐると云ふのである。

それでなければみな客観になる。そこでA.B.の関係は二次的であり、BCは一次的である。B−Aの関係（Kategorisch）と同時にBをIdeeとしての関係がある。B−CはKategorieのみである。その他Husserlの如くすればBは世界関係であるとする。それでなくとも内部的のinconcequencyを有する。で之れは善きさうだが不徹底である。

一般にはSubjektivismusと云はれる。Kantの仕事はKopernik Wendungと云はれそれ以前のMetaphysikでは主客について考へるとき対象につきてのみ考へる。それはForm Materieにつき之にSubjekt Objektを相応せしめたがKantに於てはSubjektはBewustsein überhauptに統一される。

Form MaterieはObjektに一致する。しかし更に后に之は又 Subj $\frac{\text{Form}}{\text{Materie}}$ Obj の形に返った。のみならず、又SubjektとFormが一致しObjektとMaterieが一致して昔のとは違ったMetaphysikがおこった。　所謂Neo-Kant派は種々の形で表せるが、結局FormをSubjektにMaterieをObjektに帰して原の形にしたと思はれる。之が最初のSubjektivistischのKantの解釈だった

が、このForm Subjektの結合が何を表はすかは后にのべるとして、之は彼のDeutsch Idealismusが昔の形に帰した事をある意味でやってゐる。則ちSubjektをFormに帰しObjektをMaterieに帰してゐるのであり、結局之もSubjektivismusと云へるがFormにSubjektが帰した為めにSubjektの影はあるが、SubjektではないBegriffとかnous-onと云ったものになる。然って前者の場合をSubjekt-ivismusと云へば后者の場合は或る意味でObjekt-ivismusである。而もそれはObjekt Materieと親みさへする。このときSubjektの意味が変った為のみでなくObjektを引き上げた事になる。之がObjektivismusで而してSubjektから出て来たのが結局Objektivismusとなる。

凡そ認識と云はれるものはその如何なるものにせよ、それは対象の認識であり、又対象と云はれるものは又如何なるものにせよ認識然って又主観の対象でなければならぬ。かくて主観、客観のBegriffは不充分且つ相互要求のBegriffであると云ふ考へから、例へばRickertは認識概念の此両面性に於て認識論の両道、二つの異る方法の可能を主張したのは一般に知られてゐる。[illegible]この

認識の両面の夫々一つを研究の出発点とし、一つは事実上の認識作用則ち認識主観を分析し（この場合問題ふのは（理論）認識主観と認識論的主観で之は区別さるべきである。則ち前者は psychologisch の意味の主観で、后者は認識論的に要求される来るものである。）而してその本質を理解し、后之から推論して認識対象に進み、更に之から主客を包括する完全な認識概念に到る方法で一つは直ちに対象に向ひ、先づ出来るだけ認識作用又は認識主観から之を引離して対象の本質を求め、后に始めて再び認識概念を完全しやうとする方法で。Rickert は前者を Transzendentalpsychologie と名付け、后者を Transzendental Logik と名づけ、而も両者夫に長所短所を持ち、従って互ひに相補はるべきものとした事も周知の事である。かくして Rickert は一方では das theoretische Ideal des Subjekts として認識論的主観を立て、他方では価値意味としての Gegenstand を立て、その両者の相関々係としての認識概念を確立したのである。Subjekt の極限が Ideal となり、Form がこゝの Gegenstand の位置を占める。全体として Norm 的に作用するからである。（Rickert は彼

の immanent と云ふ概念が曖昧のために困難はあるが不必要だから省く。）則ち Rickert は先づ第一の方法である。Transzendental Psychologie の方法に従って主観系列を分析し客観化出来るあらゆる必のを除外しその終極概念として認識論的主観を取り出した事は有名である。（精神身体の統一ある我が外では Gegenstand で二分となり遂に意識形式のみがあって Form としての Subjekt が残り、之が Ideal となる。）Rickert は又 Kant に従ひ、之を Bewustsein überhaupt であるとも名づけた。

之は Rickert に依ると namenlos な allgemein な unpersönlich な意識であり、所謂 nur Form である。かく Rickert の所謂認識論的主観は空虚であり無であり namenlos な厚なる Form 又は Grenzbegriff（限界概念）であるが、Rickert はこの認識の問題の為めに設定したのだが、この概念を何処までも維持しつゝ、而も問題解決に役立たす為めの単なる形式（nur-Form）である。この概念にある特性を與へたのである。則ち認識論的主観に Vorstellen（表象作用）丈に止まって Urteilen（判断作用）の特性を與へ[illegible]一

般から，更に判断的意識一般に進んだ。しかし空虚な単なる形式なる認識論的主観にかゝる特性を認め得るのは何に基くか。認識主観といふ概念には必然的にUrteilenが含まれるとしても，而もその作用は常にpsychologischeの過程で現実的主観に属し，非現実で而もUrteilenを持つ主観，つまり判断的意識一般と云ったものは如何して可能であるか。Rickertはその可能を証する為めに苦心して種々の語を蓋してゐる。（而もその為め自縛自縛であった）。Rickertは「意識一般は判断作用的主観でもなければ又それは理論的主観でもあり得ない。否，然らば意識一般は一般に所謂主観であり得ぬ。何となれば然る時は感覚として認識される意識一切を認識された客観として考へるとき主観の概念として残る主観系列の限界として意識一般を考へる事が，不可能であるからである」と云ってあるが，之は問題設定にかて抽象的，形式的に分離した概念を何処までも問題解決にまで維持せんとする事で自縛自縛と云ふ事になる。Rickertでは意識一般が判断的意識と考へるので，更に重要な特性を帯びて来る。意識一般が判断的と云はれる以上一般の判断作用に鑑みて，之れに

Bejahung（肯定）と云ふBegriffが附加されることは当然である。

然しこの意識一般が理論的主観の単なる形式たる考へが維持される限り，それは現実の判断作用のBejahungとは遠ひ判断作用のunrealな意味でなければならぬ。Rickertはかゝる判断作用のunrealな意味と云ふ見地から見て意識一般を肯定意味一般（Bejahungssinn überhaupt）又は肯定形式の内在的意味一般又はja-Formと云って意識一般の肯定作用を現実なる心理作用の肯定作用と区別する。然らばかく現実的認識主観に見出されるBejahungと云ったBegriffをun-realな意識一般に移された以上それを超越的のGegenstand（意味価値で主観に作用するときsollenとして作用するもの）との関係は如何であるか，つまりGegenstandはかゝる判断的意識一般を依然超越してゐるかが問題になる。Rickertによると判断作用一般はそれ自身として考へられるのみならず，又同時にそれを超越した対象を認識するものとして考へられる場合にかてゝのみこのBegriffは正しいのである。即ちRickertによると超越的のGegenstandはそれをbejahenに値

尺するものである。判断的意識一般の意味の必然的の相関々係者でなければならぬのである。かくRickertに於ては超越的のものを云ふ概念は理論主観から独立な概念とされると共に判断的意識一般といふものを必然的関係の下に置かれたが、さて内在的意味として現実的の判断作用から終されたBejahenを含むこの判断意識一般は現実的意識一般の他の特性との関係は如何なるものであるか。つまり判断的意識一般が、かく超越的なGegenstandと必然的関係に立つとき現実的意識一般に見られる他の特性をも、それに移して見られるが、この問題に対するRickertの答へによると判断意識一般は他の重要な特性を帯びて来る。元来Rickertは判断作用をVorstellenと区別してその特色を示す為に之をAntworten（答作用）として規定したが、総ての個体は何を予想し、何は元来未だ真理を知らないで唯それを求める主観のみが提出する所のものである。そこで此処に判断的意識一般は真理を求める主観か否かと云ふ問題が起るが真理を求める主観には限ふ主観、誤りに陥る事もあり得る主観と云ふ概念が含まれるから肯定作用を答へる作用として考へるときには之は

当然現実的な認識主観の領域に入るべきである。然ってRickertは判断的意識一般を肯定的主観とは考へたが、之も答へる作用をする主観を排斥し判断的意識一般の肯定作用を単に現実的作用と区別するのみならず、何に対する答を意味する個別的主観の肯定作用とは別の非実在的論理的意味を持つと考へた。Rickertに依ると答へる作用をする　　主観を認めるときはそれと対象との関係から考察しても、その関係は対象の超越性を傷ふものである。何故ならば総ての答は形式と内容を分離して、かくして何によって分離されたものを結合するものが「答」だからである。則ち何れにしても判断的意識一般の肯定作用はAntworten（答作用）ではあり得ない。

Ur.
Bewustsein　Geg　Bewustsein 空虚だが認識には之がなくてはならぬ。そこでこの中にUrteilenを認める。と云ふ事はUrteilenに属するpsychologische Subjektを考へる事になる。

そこでRickertは肯定作用をAntwortenする肯定作用とfraglosの肯定作用との二つに分つ。か

くして認識論的主観は正に右者 fraglos bejahende Bewustsein überhaupt を為してゐる。かくして認識論的主観は Richert では現実的の認識主観に対する Maß（尺度）となり、主観的態度の Norm となり、今は最早始めに説かれた様に総ての現実的の単なる形式でなく何を持ち主観の理論的理想となったのである。而して Richert によると主観の理論的理想の真理を求める者でなく無時間的に又 fraglos につまり永遠に又必然的に真理を処してゐるものである。Norm とは Form でそれは肯定して意識一般をもたねばならぬ。そこで問題は Subjekt Form を如何に考へるか。考へて見ると、又 Form は Subjekt に帰さねばならなくなる。

所でかゝる真理を永久に所有してゐる主観に対して対象（真理）が超越的な事は無意味である。で此処に Richert の云ふ様な意識一般と対象との間の関係を結びつける二つの道が考へられる。それは結局、主観の方へ対象を引き下して Subjekt となるか、又は対象の側に Subjekt を引き上げて Objektivismus となるかである。ところで Ideal だと考へられた主観は単なる形式であると考へら

れるのはその内在的関係にあると考へられるが、前者は心理的主観（Psychologische Subjekt）と謂ひ後者は現実的主観のある所に常にあるが、前者は理性のあるところに常に必らずしも存せず。

右者は仮令形式的に分離された超越的な概念にせよ、尚ほ主観と云ふ名を持てようが、前者は最早や本来の意味の主観とは云へない。

何故かと云ふと、前者が超越的の関係を持つのは実際は所謂 Gegenstand は現実的主観であり其の主観に対して超越的で Gegenstand と結合して得るものを主観と云ふ事はその名の濫用である。結局 Subjektivismus は成立しない。たゞ一つの道 Objektivismus が成立する様に見える。丁度この方向で Richert の所謂認識論的意識を解釈し来へたのが Bauch である。

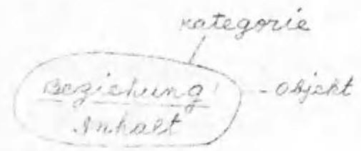
（das transzendentale Subj. Logos XII）

認識論的主観の解釈

元来客観はそれ自身に依っては基礎づけられない。客観そのもの、根拠をそのものにたのむ事は一つの petitio principii である。Kant の Ding an sich の思想に於ても然り。こゝ迄り

而してかゝる欠点を除かんとした点では Rickert の功を認めなければならぬ。然し一方に於て客観でないものは Subjekt（主観）でなければならぬ。といつても之によつて客観を基礎附けるものは主観とは云へない。元来客観を基礎附けるには客観を以ては出来ない。それは実在の世界に属するものを再び実在に属するものでは基礎附けられない。と云ふ意味である。客観を Begründen するのは第一に非実在的のもので、第二は客観を可能ならしむる制約となり得る性質を持つたものでなければならぬ。則ちかゝるものは一方ではそれ自身客観ではないが、一方に於ては客観的のものでなければならぬ。かゝる客観的非実在の世界にて客観を Begründen するので、客観の基礎には客観的（Objektiv）が横はつてゐなければならぬ。かゝる考へからすると Bauch は Rickert の認識論的主観を解釈し易へようとしたのである。Bauch によると認識論的主観はそれ自身勿論客観的ではあるが、然し客観であり得ぬ為に、それは又、主観領域にはあり得ない。何故かと云ふと主観領域の総ての個々の Subjekte はそれ自身 Objekt であるからである。かく先見的主観は主観領域に

あり得ないから、必然的にそれは非実在的のものでなければならぬ。さて、認識論的（先見的）主観は客観の可能の制約即ち現実的な客観も非現実的な客観もなく、総ての客観の可能の意味を有する。従つて先見的主観は非実在的にして主観の実在の制約となる。然し先見的主観はたゞ客観的に非実在的と云つただけでは、それは形式的の規定、てその内容的性質は未だ明らかでない。で Bauch は客観の方面から議論を進めて、その内容的性質を明らかにしようとする。Bauch によると総ての客観（対象）は多様の一定内容の組織として具体者として表はされてゐる。所でかゝる客観が可能であり、それが構成される為めには内容なき関係丈でも関係なき内容丈でも不可能であつて、両者が共に対象構成の Elemente とならねばならぬ。



而して此の両者は対象を構成するものであるが故に対象的、客観的意味を持つてゐなければならぬ。従つて内容も亦対象を構成するエレメントと

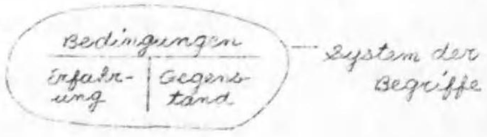
してFormとしての対象構成的Beziehungと結びついてゐなければならぬ（上略図参照）則ちこの対象に於てはFormとMaterieとは範疇的関係（kategorische Beziehung）と内容（Inhalt）を相互に貫き合つてゐる。Kantの場合にはKategorie（主観の下に作用する概念）はInhaltを結びつける為めにSchematism（Schema = Zeit-Bestimmung）を要するが、今はそれでなくlogischなPrinzipであるとする。而してかく客観的に於て貫き合つてゐると云ふ事それ自身も客観的法則的に規定されてゐなければならぬ。従つて具体的に規定された客観はその具体的規定の可能の為めに上の如く規定する所の一つの原理を必要とする。かゝる原理則ち上述の如く相互を貫き合はせ之を統一して対象を構成するPrinzipをBauchはBegriffと名附けてゐるのである。上の様に範疇的関係と内容の両者が相互に貫き合ひ、それが対象を規定する　が故に対象は上の両者を離れては存在せず、又貫き合ふ両者は対象を離れては存在しない。更に両者の貫き合ひはBegriffに依つて規定されるからそれは又Begriffを離れては存在しない。Begriffは両者

の貫き合ひを離れては存在しない。従つて又Begriffは対象を離れては存在せず、対象はBegriffを離れては存在しない。（かく、之等は具体的にバラバラには存在しないが、然し各々は区別されるべきである。）所で対象は多くのKategorienと多くのInhaltに依つて規定されるのみならず、又多数の（然らずとも幾つかの）Begriffeに依つて制約される。故に概念が具体的内容を構成する時には対象はSystem der Begriffeに依つて制約されてゐなければならぬ。則ちBegriffeは大系を作る。而論System der Begriffeは範疇的関係の大系とそれに於て結びつけられてゐる内容の全体である。則ちBauchに依るとSystem der Begriffeは客観の全体の大系である。而してかゝるものとしてBegriffeの大系はそれ自身として客観でなければならぬ。

以上の事からBauchは客観から出発して客観の可能制約に導く。それをBegriffeの大系とした。かくてBauchはこのSystem der BegriffeこそRickertの先見的認識主観であるとした。今述べた如き意味でSystem der BegriffeはRickertの先見的認識主観を客観的世界に解放し得たる

のだが，然しそれは單にRickert先見的主觀の餘歡し安へに止るのではなく，System der Begriffeと云う概念はBauch自身の組織的な立場の中心思想となってゐる所のものである。BauchはRickertと同樣やはりKantの地盤に立ちKantの思想に依りそを求めようとしたのだが，この場合Bauchの取り出したKantの思想はあらゆる綜合判斷の最高原則である。Kantにおては，この原則によれば經驗一般の可能の制約は同時に經驗の対象の可能の制約である。

Bauchはこの最高原則に全く新らしい意味を見出したのである。即ち經驗と經驗の対象と，及びこの両者共通の制約とはもとより之れを区別しなければならぬが，然し同時に經驗の可能性とその対象の可能性との根拠となってゐるものが同一の制約である事，つまり經驗に対してもその対象に対しても制約が共通なる事は常に之等三つの項を單に区別するに止まらず，夫々の関係結合を求むべきである事を暗示するものであって



以上の三項の区別は之等が一つの統一的（上図参照）の綜合関係の項である事を示すのでその関係を明かにする為めに用ひられるものでなければならぬ。制約するものが他の二つの制約されるものと同一でない事及びこの二つの制約されるものが互に同一でないと云ふ事は勿論明白である。然しBauchに依ると之等の三つのMomenteの何れもが他と同じにならぬが故に，又之等二つは総て他のものなくしては存在し得ぬ事も明白である。然らばBauchは三つのElemente（Momente）の関係を如何に考へたのか。

第一に經驗とその対象とは一つの関係を持ってゐる事は容易に分る。然しBauchにとって実に重要な事は一方に於ける經驗及びその対象の共通の制約と他方に於ける經驗及びその対象の関係である。（下図参照）

図式は簡單であるがlogicalの為である。かこの図式は結局に於て妥当であろう。この場合Erf.とBedingとの関係は構成的統制的であり，BedingとGeg.の関係は構成的である。

Bauchに依ると制約するものとされるものとは同一ではないが分離すべきではなく寧ろ之はあらゆる可能なる関係の中最も密接なる関係に依って統一されるein Ganzである。何故かと云ふに制約されるもの、制約者であると云ふ事が制約者の本質であり制約者に依って制約されたものであると云ふ事が被制約者の本質であるからである。上述の如く制約者と被制約者はein Ganzとなり、この全体はこの二項を他にしてはないが、然しこの全体はこの二つの項に分れる。（下図参照）

更にこの一方の被制約者がErfahrung（経験）とGegenstand（対象）の二項に分れるのである。かく解する事によってBauchは経験の可能を次の意の如く解した。即ち、対象はそれが対象として経験されない場合でも制約者とは離す事は出来ない。然し対象はそれが一般に経験を必制約するところの制約者に依って対象に解したのである。Bauchに依ると、之が則ちKantの最高原則として解く真の意味であるとする。かくてBauchは更に進んで互に他なくしては存在し得ず、それ等は互に他

と相互的に結合する必然的相関々係をなす。制約者被制約者は共に客観的である為めには客観的理性そのものの領域に置かれねばならぬと云ってゐる。此処に云ふ客観的理性とは前述のSystem der Begriffeを指すのだがBauchに依るとこの客観的理性（Logos）はそれ自身単なる制約者でもなく、又被制約者でもなく、その両者に対する之はゞlogischな立場である。客観的理性はそれ自身両者に分れ両者に於いて自らを見出すところのものである。かゝる客観的理性（Logos, System der Begriffe）と云はるゝものはBauchに依ればあらゆる変化の中にあって自ら変化しないものとして凡て存在する一切のものを必然的に規定し支配する原理でなければならぬ。

則ちSystem der Begriffeにはwerden（生成）と云ふ事はない。先づそれは現実を支配する真理の構造形式であり、現象の方則だが一切の現実者は常に生成の状態にあると共に上述のSystem der Begriffeに依って支持され規定される。故にBegriff自身は実在中にあり、実在から離す事は出来ない。故に又現象は単なるScheinでなく、その中にBegriffを含む真なる現実であるとそこ

で此処になるべく主観的の Subjektivismus を排さうとする。Begriff の内容が大る事はないが、マールブルグ学派の考に依ると対象を Aufgabe としてそれが規定され、それに依って Begriff は豊になるとするが我々の認識は個人的であって、之が増す事もあると云ふのである。然し Begriff をかくの如く考へる解釈に対して(即ち Cohen 等の如く Gegenstand を Aufgabe として考へる事に対して)Bauch は反対し、Cohen は依然として Anthropologismus の痕跡を残してゐると云って攻撃してゐる。

Bauch に依ると Gegenstand そのものは決して人間の Aufgabe となる様なものでなく、只だ人間の Aufgabe として考へられるのは対象を認識する事である。対象認識が時間的に主観に依って行はれる限りそれは勿論無限の Aufgabe である。時間的主観に依る対象認識そのものは勿論 endlos であり、有限なる主観に対しては無限な irrational な残りが常に有する。然しこの irrational と云ふのは時間的の理性に依って到達出来ぬものと云ふ意味で、かゝる非理性的なものはそれが為めに決して客観的理性に対立するも

のではない。irrational なものが主観に対して永久の Aufgabe の意味を持ち得るのは Das Bedingende (客観的にみた Vernunft Objektive Vernunft) に対する Das Unbedingende たる関係のある為めでなければならぬ。即ち irrational なものは主観から見た未知の Das Bedingende と das Bedingte との関係であるとする。Bauch は更に進んで Kant が永久の Aufgabe と解する Idee と云ふ Begriff を取って来て今述べた様な思想と結びつける所の個々の時間的主観又は個々の現実的のものから見れば理性的概念主観たる Begriff は正にかゝる意味の Idee である。個の主観がこれを目標とするのみでなく個々の現実もこの Idee に依って動いてゐる。然しかゝる目標は現実者から引離されて全然主観化されては現実者の目標たる意味を失ふ。然って Bauch に依ると両者の結合関係を明らかにする前が主要で、之は総ての学の根底とするところのもの、総ての学の目的とする所のもの、即ち眞理そのものに於てよく表はれてゐる。学は眞理を目標とするが故に、眞理そのものは全然客観的理性は現実者の Grund であると同時に[illegible]け

れはならぬ。則ち有限の人間の立場から見れば目標で永久の立場からすればGrundとなると云ふのである。

以下　概念の体系を明かにする為めにBegriffの構造を明かにしなければならぬが真理を作る三つのMomenteとしてやはり普通のlogosの如く第一にUrteil, Begriffが中心となる。后者は構造としては一様的に考へるのである。この中Methodeも入れる事も出来るが、一般にUrteilが要素となる。然しUrteilはlogisches Urteilでなければならぬ。普通のpsychologisches Urteilを要する事実的Urteilとlogisches Urteilとは区別さるべきである。Begriffはlogisches Urteilとの結合であるから主観気分になくBegriff構成を我々は出来ないと云ふ考へ方でLaskの判断論とBauchの判断とはその点が異るのでLaskは判断作用(主観的判断作用)とlogisches Urteilとに分つ。Laskの場合にはUrteilとは分別してつける作用でその彼岸にGegenstandを認めるが主観的にのみする限りそれとは独立のものを考へる此の点ではBauchとは似てゐる。

かくの如くある意味でUrteilを二つに分け一

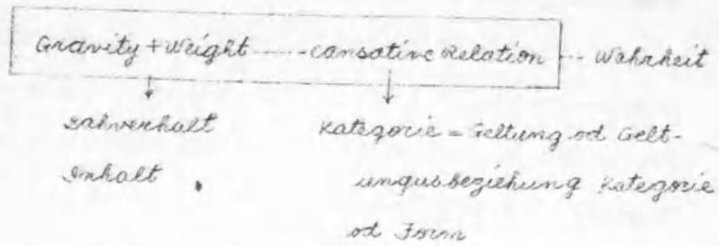
方を作ける。又は主観作用としてUrteilを考へその及ばぬ所にGegenstandを置いてゐる。Laskの如きは実証主義を主観主義から離してゐるから或る意味からすると徹底してゐるがUrteilには真偽があるがGegenstandを分つとするとその標準がない。Urteilに Negativ と Affirmativeを考へれば標準を単一に考へられぬ。つまりObjektとして二つWahrheitと及真理とすればうまくゆく。然し之はObjektで判断の根底にある。之はGegenstandの界の如くprimitivで分けて結合は出来ぬがObjektは分別出来る。それが「項」を持つことは主観の及んだしるしでそれが主観領内だとする。然しこの二つの所が一は一致し他は一致しないと云ふが、その為めには何等かの意味で之が原之なければならぬ。所が前からの立場では之を見る事は出来ない。

そこで神秘的に考へてGegenstandのある力を主観に味へなければならない。かゝる行き方で徹底してしまふとMysticismusに依らなければならぬ。

BauchはUrteilをGegenstandにもみとめて、それが結合すればBegriffとなるとする。然し又

は主観的ではない。で Lask の様に判断作用から来らず、いきなり Begriff に迫れば Gegenstand の中に Subjekt もあるのだからそこで面倒になる。(Urteil を見るのだが、その為めにはその準備的のものを述べねばならぬ。)

次には前にのべた真理の構造形式を見なければならぬ。それについて先づ Bauch に於ける Wahrheit と Geltung(妥当)と Sachverhalt (事態)の三つの関係に就いて云はねばならぬ。この三つの Momente は互に他の Momente なくしては存在出来ないが、同一ではない。例へば「引力と物体の重さは原因と結果の関係にあり」と云ふ命題をとればかゝる引力と物体の重さが因果の関係にある事は勿論妥当的で真理であるが、この場合の事態(Sachverhalt)は事実上かゝる関係にある事、その事であって、かゝる関係にある事その事は妥当でもなければ真理でもない。則ち今の場合引力と物体の重さとの一定の関係が事態であり、而してかゝる因果関係そのもの(Kategorie で表はされるもの)が妥当であると云へる。則ちこの妥当関係は Sachverhalt を規定するものであり、事態の規定されたものが真理である。



則ち Geltungsbeziehung は規定するもので、Sachverhalt は被規定者である。規定するものに依る規定されるものゝ規定性が Wahrheit である。で Geltungsbeziehung は Sachverhalt を規定して Wahrheit とする意味に於てそれは Wahrheit の Form であり、Sachverhalt は Wahrheit の内容である。次に Bauch は単なる形式的真理なるものを認めて、普通の形式的真理は単なる形式的真理でなく真に単なる形式的真理とは単に内容的な真理と同じく無である。そこで Bauch によると、Logik Mathematik を形式科学とする時もその場合形式的真理を内容的真に帰し得ぬのである。かく真理そのものでは他の二つの Momente が互に相関的に統一をなしてゐる以上真理は常に一定の構造を持つて居なければならぬ。で Bauch はかゝる真理の根本形式を三つに区別する。それらは勿論

分離しては意味をなさない。

この三つの根本形式は Urteil Begriff Methode である。（こゝで必要なのは Begriff の構造である）。之等三つの構造は何れも主觀的要素のある所の Begriff であるが Bauch はその Geltung そのものとそれを主觀的に意識する事を区別して之れを適用せんとする。勿論かゝる区別は Kant 以來試みられて居り又現代も多くの哲學者が試みてゐる。例へは現代に於て Rickert, Cohen, J Cohn Lask 等の如き人々をあげられるが、彼等さへ充分に徹底的には一の区別を為しとけてゐないと考へられる。先つ判斷について云へば例へば Lask の判斷に就きその特色は判斷に対し transzendental は、対象的な意味を認めず、単に Gegenstand を模像（Vorbildung）的に補へる手段を考へてゐる事であり、從って Urteil は主觀領域中に入れられ主觀に成ってはよく觸れられない。最高の意味の客觀者の領域から除外されてゐるが Lask が、この二つの領域（主觀、客觀）を区別した事は許されるとしても判斷については上の二つの領域の区別を無視するものなくして、而も Lask には反対にむしろ主觀によって觸れられない客觀領

域に於ける意味を特に力説せねばならぬと考へてゐる。かくて Bauch は一切の主觀性及び一切の対象選擇の彼方にある真の Gegenstand 的の判斷の意味を主張したのである。この考へは意識的に Leibniz に溯ってそこから出てゐる。

Leibniz から Bolzano の系統の客觀主義である。それは Leibniz に於て表はれる Cogitatio possibilis である。

之から Bolzo の Satz an sich が出で、之が他にも発展してゐるが、一つはこの考へに基ってゐる。（他の方面とは Husserl の Phänomenologie である）。前述の如く Lask の場合には Urteil が一つとして客觀に入れなかつた、が Bauch は主觀的と同時に Cogitatio possibilis 的のものを Gegenstand の中に置いてゐる。その事は彼の Kleine Schrift の中にある。

Bauch は logisches Urteil を事実的な面に対立せしめ、后者は logisches Urteil がなくては成立出來ぬ。所謂否定判斷は実は真の logisches Urteil ではなく、寧ろそれは否定的命題と云はれるべきものと考へる。

Welt
Begriff

Urteil (log) ……この中には否定判断があってはならぬ。否定判断をするのは主観の psychologisches Urteil であるとする。

かくて Bauch は厳密な判断の logisch の意味を求めてその Gegenstand の性格を明らかにする為にまた事実的判断と対立させる。Bauch に依ると我々の主観的判断で事実的判断をする場合 我々は之に依って事実的に現実的又は非現実的な対象を措定する。この意味で判断は Urteil と同様單に措定現象にすぎぬ。それは非対象的領に入るべきものである。即ち それは心理的のものである。然るに若しかゝるものが所謂 logisch であるとすれば対象は logisch のものゝ外に追はれねばならぬ。即ち logos の方は対象と云ふ概念に及ばぬものとならねばならぬ。所が Bauch によると logisch のものは gegenständig なもの、そのものでなければならぬ。つまり Urteil 構造は Gegenstand 構造でなければならぬ。かくてのみ対象構造は措定と云ふ主観領域に入り込む事が出来るのである。

主観は客観一般を措定出来るのであり、又主観の側から客観を発見出来るのである。かゝる所謂 logisches Urteil は彼自身の語で云ふと、表象された内容の事態 (Sachverhalt) 的関係そのものである。

即ち Bauch に依ると事実的判断作用の表象関係の以外的補給の根拠がこの事態的関係に存し、又を補充して初めて事実的判断を生ずるのであるから、この事態的関係そのものが真の logisches Urteil と見做されるものである。なほ判断には Cupola の問題も有るが、此処では省略する。この logisches Urteil は前述の如く真理そのものゝ根本構造の要求的形式の一つであるが、今この logisches Urteil の構造は如何なるものかについては此処に省略する。Bauch によると判断は互に他なくしては妥当する力を有たぬが、然し互に区別されるべきであり、而して Begriff は判断に基く限り判断は Begriff に対し一層要素的基礎的意味を有する。然らばかゝる所謂 Begriff の概念内容は何であるか、此処に Begriff に就き直ちに内容に思ひ起すのは前に判断に於て事実的判断と論理的判断と区別したのが今 Begriff に於ても同様に行し

て事実的 Begriff と logische Begriff と対立させ得るか否かと云ふ事であるが Bauch は之に対してその対立を撤廃し所謂事実的 Begriff を認めるのみである。

Bauch に依ると傳統的の形式論理学に依ると例へば物体が落下する場合には常に既に物体と云ふ Begriff と落下と云ふ Begriff を持ち、之等両者を結合して判断としたのであると云はれてゐるが之は誤りで例へば正実的事実から云つても無数の人が物体の落下するのを見、又この落下の事実を表現したにしても Galilei 以前には落下の概念に到達したと云へない。即ち Galilei 以前の人はこの事実は知つても落下の Begriff は知らなかつた。我々が落下物を見て物体は落下すると云ひ得ても然しそれが為めに我々は物体落下の概念を持ち之を結びつけて Begriff としたとは云へない。

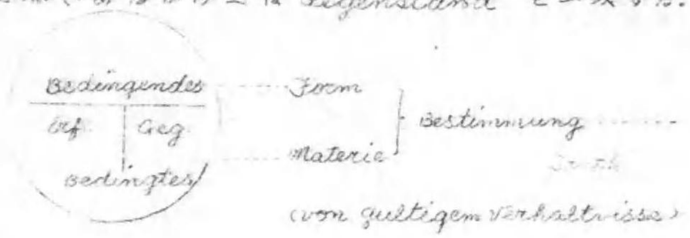
然つて Urteil は Begriff の結合と云つた様な形式論理学的な考へは要するに Logik の領域に進めず事実的なものゝ領域に止り表象の結合としての事実的判断を云ふにすぎないのである。之に対しては一応疑問がある。例へば我々が三角形は三辺で囲まれた平面上の図形であると云つた場合、然し

て事実的に Beriff を持つてゐると云へないであらうか。種々の Beriff を結合して一つの判断をして Begriff を作り、之を Begriffsbilden と名附けてゐるが、Urteil のみならず、Begriff と思惟の対象として考へられる事実的 Begriff も存在出来さうに見えるが Bauch は之に就いて次の如く答えてゐる。勿論 Begriff の多くの統一だがこの場合所謂 Urteil は logisches Urteil でなければならぬ。普通に Begriffsbilden は事実的なものゝ領域の中に存在するが之は Begriff の構成はせぬ。所謂 Begriffsbilden 中には Begriff はない。勿論この Begriffsbilden は事実的判断の統一であり、その統一は Denkgebilde 或は Satzgebilde と云はるべきものだが之は何処までも Gebilde であつて Begriff ではなく、之は事実的思惟が Begriff を捕捉する為めの手段にすぎない。Begriff は之等の Gebilde に依つて捕捉されやうとされまいと無関係に成立してゐる。かく Begriff が Gebilde を通じて事実的思惟に依り捕捉されはするが、然し事実的思惟からは独立であり、この点宛も logisches Urteil が事実的判断から独立なのと同一である。たゞ然し事実的思惟では事実的判断は

構成されるが、事実的概念は構成されない。以上の見地からBauchはBegriffは事実的思惟に対立するものとして思惟に対するGegenstandと名づける。則ちそれは主観性から独立であると云ふ意味でのGegenstandである。而してそれを掴へる事は勿論主観に対してAufgebenされたのだが然しBauchはBegriffそのものをAufgabeとする考へを否定してゐる。BegriffはAufgabeでなく永久に独立であるとする。彼はAufgabeはたゞ主観に於る概念の妥当構成の摂取にすぎぬのでBegriffそのものではないとする。又Bauchに依るとBegriffはLogisches Urteilと同様真理の世界に属するから「誤れる」概念(Begriff)と云ふのは無意味であり、「誤り」であり得るのは事実的思惟であつて事実的思惟が概念の摂取を誤るときは勿論誤りである。

故に然来の所謂「誤れる概念」(例へば木製の鉄、丸い四角形の如き)は実は「誤れる概念」ではない、凡そ之をBegriffとは絶体に呼べぬのであつて、それは唯、事実的思惟の誤れる摂取に対する名称にすぎない。要するにBauchに依るとBegriffは事実的思惟に対する対象である。

(Begriffは事実的のものとして、そのSystemが世界であるから之はGegenstandと一致する。

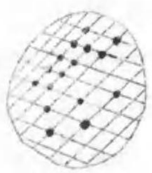


世界には誤つたBegriffはない。然しその極微の中でBauchの説いた様に、誤れる人はその内部に於て規定されてゐるのであるが、之はErfahrungの中にある。之は何故であるか、若し対象摂取の場合とにあり、正者の摂取の為めにはErfahrungもGegenstandも同一のBestimmungで規定さるべきである。然し同一に規定されるとすれば、そこにはErfahrungとGegenstandの区別はなくなる。区別する為には規定が異らねばならぬ。そこでErfahrungとの関係には統制的(……idee(kategorisch))として作用するとする。又Materieの方には構成原理として作用する。之は如何にも徹底した様だが同類がある。しかしこの間は置いて、この方一方でObjektivismusを見よう。哲学界に於て、Jna-

tional なものは量に理性に規定されぬもの、意であるとする前提は Rationalism であり、Bauch はこれを云ふ。(Rationalism たる故桑木氏と同一である)。かゝる立場からは主観に対する Irrationality で Objekt には理性化されてゐると云ふ事である。かゝる意味で統制原理としての Idee になるのである。之は現実には得られぬのだが、かゝる方向を與へる意味で Idee である。と云ふ考へ方となる。客観的には理性化されてゐると考へる。(概念の構造は詳しくやらず簡単に云はう)。

然らば Begriff そのものの構造 (struktur) は如何であるか。一図に云へば Begriff の構造は Kategorisch の関係の Gefüge (接合体 joint Knot {Kat / Begr} で世界を網で蔽ふ様に包んである。即ち概念自身が「Katigorisch な関係の関係」である。と云ふ事が出来る。然て Begriff は Kategorie の関係の Gefüge であると云へば、この Kategorien の Gefüge の特質は如何であるか。一般に Kategorie の関係は Kategorie の相互関係であって、如何なる Kategorie も独立な妥当関係として相互関係から離れて存在するものは一つもな

い。判断が要素的妥当関係であり、之に基き Begriff 複合して妥当関係となる時 Urteil と Begriff Kategorie と Kategorien の複合とは不可離の関係にある。如何なる Begriff もそれが Kategorie の複合として単純な Kategorie の関係なる判断を含まぬものはなく、如何なる Kategorie もそれが要素となり得ないものはない。Kategorie は勿論ある特定のこの Begriff あの Begriff の要素とならねばならぬと云ふのではないが、何等かの Begriff の要素とならねばならぬ性質がある。されば Begriff の Kategorie が如何なるものも Begriff それ自身はその中から現れ、多くの Kategrie の統一であると云へる。即ち Kategorie の複合体を一つの網とすれば Begriff はそれから種々の方向に向ってはしり、又方々から集る糸の結び目と同様である。然って Kategorie の関係を真に成立するものは Begriff と云へるのである。(下図参照)



この黒点が Begriff であるが、図の如く Kategorie のお互に (Begriff 間) 異る事はあるが、唯一つの Kategorie と一つの Form によって

Materieが規定されるのではなくFormenに依つて規定されるのである。それ等は直接間接ではあるが互に関係がある。而して之等がsystemを作る。(System der Begriffe) そこで前述の機械なのは之れ全体がSystem der Begriffeであり、それが二つのMomenteに分れる(Materie とForm) そこでBegriffeである以上materieのない又はFormのないBegriffeというものはない。考へられてもFormをBegriffeを代表させるのである。Begriffは二つの方面に補足要求をする。一つはMaterieの方面で他は、或Begriffは独立して存在せず他のBegriffの補足を要求する。この両者の関係が前述の鋼の目の如くなつてゐる事を云つてゐるのである。かくの如くその場合その一面はMaterieを要求するが、その場合はFormの側がMaterieを要求すると考へなければならぬ。

前述の如くdas Bedingendeでは Begriffを代表せしめる一方にdas Bedingtesを補足的に要求せしめ、全体としてもdas Bedingtesを要求せしめる。このSeiteはBedingungのSeiteで以つて、

Begriffを代表させると云へる。所でBegriffは常にMaterieを直接に要求しておるか否か、形式的のBegriffその底なる感覚を含まぬものはない。然しdas Bedingendeはdas Bedingtesなくして存在するが、間接にはBedingtesを含まねばならぬ。数学の式も内容的な様つてその底には感覚的なものがある。そこでMaterieには含まぬと云ふに反してこれはMaterieとは関係であつてもよいが結びつけられなければならぬ。之はNatural Lawも同じである。

感覚:—

元来感覚と聯関を離つて現実的なものと云はれる為めには感覚それ自身が既に聯関の中に含まれておなければならず、而してこの聯関が則ちKategorieの聯関だが、今このKategorieの聯関則ち結合を成立せしめるものはBegriffeであるとすれば、様つて感覚に対し最も重要な意味のあるのはBegriffであると云はねばならぬ。則ち感覚を秩序附けるのはBegriffである。さてBegriffが秩序づけの原理であるとすると此処に二つの注意すべき点がありわれる。第一はBe-

griff は Beordnung の原理として秩序づけられる Materie を離れては無意味であり Ordnung は Materie なくては無意味である。第二にはこの原理と Materie との間の秩序関係は単に主観的の関係か、又はかゝる関係に対する認識主観の態度とは無関係である事である。さて Begriff は Kategorie の関聯の間に於てもそれ自身すでに特殊の Gefüge der Kategorien であり、かゝる特殊性に依り一般的の範疇聯関中の特種なものであると云へるが、かゝる Begriff の特殊性は Begriffe の Materie の特殊性とは云へない。そこで此処に Begriff の普遍と特殊の間の困難な問題が起る。一般に普遍のない所には特殊はなく、特殊のない所に普遍はない。かく何れの一方も他の一方なくしては存在し得ない必然的相互関係をなしてゐるが、然し一方から見ると Begriff は個々の特種と対立して例へば自然法則と云った普遍には特殊が結びつかない。それはその中に感覚がないからである。文数学上の概念や感覚は則ち特殊であるけれど、この特殊は普遍と結び附かなければ存在し得ない。例へば今書いた三角形は三角形の一般がなければ存在し得ない。則ち一方的である。然らば一見すると Begriff と特殊との関係は一方的に見えるが、之は相互的に結び附いてゐなければならぬ。そこで之は間接でもよいのだと云ふ事によって免れやうとする。Sinn についても Lotze の Platon の解釈（Logik 第二部認識の所にある。）の中に例の主観的な我々の感覚と、それ自体として存在する Idee 的の感覚とを区別するのである。で主観の側のは個々の Empfindung で変化し又消える。又他方の Empfindung はそれ自身存し、Idee としてそれ自身を維持する。例へば赤が黒になる事はない如く、かゝる感覚の両面を Lotze は Platon の Idee としてゐる。然って概念の Sinn は主観的の Sinn では Begriff の Materie とはならない。それ自身を維持する所の Idee 的の Sinn でなければならぬ。これが Logik の最所で、そこには Werden がある。之が現実界に於てかく考へられるので消えない。則ち間接に Materie として表面上 Form のみでも結びつくものは Idee 的のものに結びつかねばならぬ。

das Allgemeine と das Besondere :—

Begriffe は das Besondere から das Allgemeine

を要求するがその反対はないかと云ふと違ふ。相互的である。das Allgemeine も das Besondere と結び附かねばならぬ。その著しい例は Sinn とそれを規定する Form（例へば赤い花の如き）である。が Begriff である以上 Sinn と結び附かねばならぬ。Sinn は Subjektiv で Form が Objektiv でそれが結びつくとすれば、それは Subjekt の範囲内に止まれば Objekt が確立されぬと云ふ事になる。そこで Sinn を三つの Momente に分つ。

1) subjektive Empfindung

2) その Ursache（物理的原因）

3) objektive Empfindungsqualität

がある。普通は 1)+2)（subj. Empf + ihre Ursache）であるが客観内容も客観的のものも入れなければならず、Lotze が Kant と同じ様に云った彼の青そのもの、赤そのもの、が必要なのである。そしてその場所は 3) の objektive Empfindungsqualität である。すると das Allgemeine が Formen の方になると objekt. Empf-qualität が das Besondere としてそれに結びつけられ、その名は Objekt となる。で大体は Objektiv であり之を拡張すると、之は Empfindungsin-

haltlichkeit überhaupt となる。完全内容なき das Allgemeine がある様に考へられるが実は然うでなく Empfindungsinhaltlichkeit überhaupt が結び附けられてゐるのである。

この困難（das Allg と das Besond）を Bauch は両者の場合の結びつくと云ふ事の異った意味に依って解決しようとする。Bauch によると自然法則等と全く感覚と結び附くべくこの場合はそれ等は勿論主観的感覚と結び附かず客観的内容と結び附くが、后者はこの時その種々な特殊性、全体の普遍的構成法則たる客観的感覚内容そのものとして結びつく。右（上述）の如くその場合を問ず das Allgemeine と das Behsondere は必然的相互関係をなすが Bauch によるとこの関係は段階的な一つの依存関係である。如何なる特徴が規定されるかは概念の段階に依って異り、この意味で Begriff は das Besondere の普遍的制約であり das Besondere はその被制約者である。Bauch に於ては Begriff の構造は以上の如くであり、それは真理の構造形式の中心否あらゆる真理は Begriff に於てはじめてその構造を解[illegible]ある。かゝる Begriff は如何なる意味にもせよ[illegible]的

でなく前述の如くGegenstandと云はれるべきものである。Begriffの構造が以上の如くであるから又我々は先の綜合判断の最高原理に於ける経験とその対象の制約者はBegriffなる事を知る。然らばかゝる制約者たるBegriffと所謂Begriffの体系又はIdeeとWahrheitとの関係は如何に規定されるか。Bauchに依ると、Begriffが制約者と云ってもそれは孤立してゐるのではない。Begriffはその性質中二つの方向があり、上の二方向に向って補充要約的に存在する。その一つはdas Besondereの立場である。Begriffは常にdas Besondereの普遍的制約ではあるが、夫れ自身das Besondereではなくその間には補充要求的関係がある。他の一つはBegriff自身のAffinitiveな無限的な補充要求である。個々のBegriffは勿論特殊者の普遍的制約であるが、それは孤立的にあるのではなくBegriffの親和性(Affinity)の普遍的連関の項として制約者であるのである。個々のBegriffは補充要求的のものとして何等の全体者でもなく、自己の中の特殊者制約の全体ではあり得ても、全体のではない。das Besondere全体はBegriffの全体的親和的新関に

よって制約されねばならぬ。之こそはSystem der Ideeとよばれるものである。而してBegriffは自己の含むdas Besondereの制約の全体であってBegriffの大系は凡ゆるdas Besondereのあらゆる制約の全体であり、而も制約者と被制約者は不可分の関係にあって概念の関係に於てあらゆる普遍的制約者とあらゆるdas Besondereの被制約者の相補的限りIdee(Wahrheit)は制約者全体と被制約者全体及びそれ等の全体の三つである。此の三つの方向であらゆる普遍的制約者とあらゆる特殊的被制約者の全体でなければならぬ。両者は異るとは共に不可離の関係にあり、之は無限的全体の中に相含してゐなければならぬ。真の制約者は孤立せる概念ではない。Begriffの体系で、その無限的全体が可能的にされた経験とその対象の二つのMomenteに分裂する。綜合判断の最高原則はこの事態を示すのであり、先にのべた論理的場所とはBegriffの体系そのものに他ならぬ。

以上で西南独乙学派のSubjektivismusはBauchに依ってObjektivismusに徹底されたと云ってよい。Laskも異った意味でObjektivismusとなった。

かくてまた主観の権限が極度に縮少された事も明かである。Bauchは此のBegriffの体系をまた世界とよび、又或る場合には主観的のIchだとも呼んでゐるが「感覚的我」の事を云ふので自覚的我の事を云つてゐるのではない。而して意識的我は経験的主観である。我々は以上の説によつて多くの問題を含むと思ふが、その根本的のものについて反省すべきである。則ちBegriffの体系は制約者として論理的場所として被制約者たる特別者一切を超越し主観も超越して客観領域を作る。主観領域は寧ろ客観領域の客観として制約されるべきである。それ故にBauchは主観的のものと客観的のものは同一であると云つてゐる。之はたしかに制約者の客観性を云ひ客観的制約者を見るため客観的に超越してその制約者を拡大して之れでdas Besondereの全体を制約するとし、主観客観全体と被制約者に分けないで二つの項に重点をおいてみようとした為めである。然し最高原則のThesenに従ふ限り経験、認識を問題とする限り相互関係の三項を認めねばならず、被制約者は二項に分れ一度客観とされた主観も何かの側面で所謂客観と区別さるべあるとしてBauchは制約者

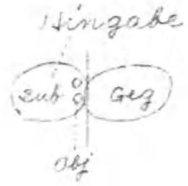
被制約者の区別、相互関係、従つて三者の概念の相互関係を云つて、その相々は不可離であり、それがなくては何もないと云ふがそれはlogischに形式的に規定されるのみで実質的、内容的には各項の重要性は異ると云へる。則ちBauchは無限的相対は可能化された経験と対象との二つのMomentenに分裂すると云ふが、何故かゝる無限者が相対立する二者に分れねばならぬかは別として事実上この対立を認めるとしても、その同一制約者への関係は必ずしも同一ではない。則ちBauchはこの同一制約者が経験又は経験する主観とその対象として対して共に構成的であると認めるが、主観に対しては意味構成的に関係し、Gegenstandに対しては存在構成的に関係する。（下図参照）

然るにBauchにあつてこの制約者（Bedingendes）は対象（Gegenstand）の統一の全体を構成するために再帰的に存在に現在する。他方この制約者（Bedingendes）は殊に主観に対しては直接なる主観の経験に対する永遠のAufgabeとして統制的機能を有する。しからば、同一制約者が対象（Gegenstand）には

存在構成的に現在的に関係するに対し、経験（Erfahrung）（則ち主観）に対してはそれが統制的である限り課題遂行として主観の認識が実現する時にのみ現在的意味構成的に関係をすると云はねばならぬ。制約者が対象（Gegenstand）には常に現在的だが主観（則ち Erfahrung）に対してはその構成は不可能的であるに止る。何故ならば主観の事実的思惟は真なる認識を為し得ると共に誤りでもあり得る。常に真の認識が実現されるとは限らない。況に Bauch は対象が対象たるにさへ、又対象として経験されぬ時さへ制約者と引き離せぬと云ひ Begriff は対象から主観性として独立であると云ふの必要が為めである。然るにかく対象（Gegenstand）又は対象の含む真理（Wahrheit）が主観から隔離されるとすれば主観的の真の認識と誤りとは何れによって決する事が出来ようか。換言すれば主観の事実的思惟が如何にして真理の捕捉が出来るか。問題は又逆転して我々は Objektivismus 一般の陥る困難に陥らねばならなくなる。或は同じく Objektivismus なる Bolzano の真理自体の捕捉の如く、彼は Wahrheit an sich の存在の為めには人間を必要とせぬ（Bolzano:

Wissenschaftlehre III を見よ）と云ふが、その捕捉が果して可能か否か問題である。彼の云ふ Wahrheit an sich は「対象をあるがまゝに表してゐる命題」であると云ひ、その Gegenstand は実在論的のものである。然し彼は、かうだと云ふが我々は我々の意識を超える事は出来ない。唯も意識の中で Gegenstand を so wie にうつす Wahrheit an sich をつかまねばならぬ。しかしそれが so wie であるか否かの為めには我々は比較せねばならぬが、之は Subjekt（Bewusstsein）の psychologische Evidenz に訴へた。之等の事は上述の彼の著にあるが之等はその出版当時（1837）は排斥され、顧みられなかったが、Husserl がその真価を認めた。（当時之れ丈けしか出てゐなかった。且に彼 Bolzano の Erkenntnislehre がおてゐるが、之には Husserl は反対だったらう）。之に依って Bolzano は一躍有名になったが、それは惜て認識の真理を決定するのに彼の如く psychologische Evidenz によるか或はその行の反撃として übergegenständliche な対象則ち意味によるか、又は Husserl の如く Hingabe と考へてみるかする他はない。

Lask がその困難を救ふ如く見えるが之も結局 mystisch しかない。



第二　認識論に於ける主観主義

Husserl の純粋現象学を以つて直ちに認識論とすると認識論の傳統的意義に鑑みて異議を挟むものがあらう。Husserl が自然的態度に基き経験的認識論を排斥するにせよ、その現象学が如何に認識論を根底に持つかはまとまと reine Phänomenologie が数学の要求から出たと云ふ歴史は除いても自所の reine Phänomenologie を transzendentale Phänomenologie と云ひ、その唯一の探求目的を transzendental Bewusstsein と云ひ、かゝる意識の Reduktion（現象学的）を transzendentale Reduktion と云ふのを見てもわかる。Husserl に依れば phänomenologisch Reduktion 及び reines Bewusstsein を transzendental と云ふのはこの phänomenologische Reduktion に依つて見出される意識（Bewusstsein）の絶対的領域が内面的必然性に顧みて意識その必のゝ対立者、原理的他者、超越者の意識的所有を含む事、又超越者の感覚的妥当的認識の本質及び可能性に関する最深の認識問題の唯一の思惟可能の解決根本が此処にある事に基くのであり Phänomenologie はかく Reduktion により transzendental な問題に必然的純粋意識に至るところが transzendentale Phänomenologie の名に価すると云ふ。

所が Husserl に於ては真の認識論の問題は超越者の問題に限られず認識し得べきで、らゆる対象性現実性は総て認識の問題となる。則ち前述の如き超越者にせよ前純粋意識にせよ、あらゆる認識可能のものは認識論の問題となる。で認識論は一般的に認識論として可能で超越者の認識論的未の意味の die transzendental Erkenntn はその一部にすぎぬ。かくして Husserl は本来的には超越者に関係すると云ふ意味の transzendental の意味を拡大して上述の様に広い認識領域に含ませて transzendental と認識論的を同意化し

て，あらゆる真の意味の認識論的のものに対し，純粋の真の認識可能性のあらゆる問題に先見的を用ひるに至ったのである。

註．勿論普通の Erkenntnis-lehre では外界の対象認識が中心だが Phänomenologie では Erkenntnis-lehre で主観のものも対象とする．又勿論普通の Erkenntnis-lehre も Subjekt 対 Objekt の問題をあつかふので Subjekt の反省もあるが Phänomenologie ではその関係の認識をも反省する。）しかし Husserl に依ると真の存在する対象と対象の妥当性認識とか認識論の指導的 Idee であるにしても真と妥当との一方にのみ偏して純粋認識理性（reine logische Vernunft）の理論のみを目指して非理性を無視する事は誤りであり，純粋意識で対象と理性とは意識の本質乃至意味上の概念的可能性の勝れた層ではあるが，それは対立層，非理性とは全く不充分であり，この対立層がなくては研究し得ぬものである。乃ち理性，非理性のあらゆる区別前に認識的意識一般が先づ何等理性的問題を持つ事もなく，同等の故別あるものとして研究さるべきこと（Husserl は之を Idee に於てやった。）即ち認識的意識構成の

一般理論はあらゆる認識論的な解明に対する前提で之に基いてのみ本質の理性問題，真なる存在，真理そのものゝ存在が明かにされる。故に例へば普通の知覚，構想（Einbildung）回想（Erinnerung），空想（Phantasie）形象意識（Bildbewusstsein）等あらゆる構成意識の分析記述は，それ自身にも重要な意義価値があるにせよ Husserl では認識論的問題の解決の前提としての意味をもつ事は明らかである。今述べた部分的研究は弟子達がやってゐるのみならず Husserl に依れば認識は意識全体，純粋意識の全域を含む名であり，認識一般は一つの統一体であり，統一体は理性と云ふ名のもとに包括され認識的理性認識論（藝術的）側面，価値的側面，評価的実践的側面は不充分的に結びついて居るから認識論は価値論意義論と分離して存在せぬ。特殊理性の類に於って分たれ如何なる先見的学も存在せず唯一つの先見的理性学があるのみである。而して Husserl に於てはかゝる唯一の先見的理性学こそは純粋意識一般の唯一の先見学則ち純粋現象学又は先見現象学に帰するのである。以上の如くにして Husserl の現象学の関心乃至動機が認識意識の問題，然って認識論的

問題となることを知り得る。然らば純粋現象学的認識論が伝統的現象学と区別される最も根本的特徴は勿論 Husserl の所謂「自然的態度」に対する所謂「現象的或は先験的態度」であると云へる。然し所謂「自然的態度」は如何なるものかあるか。この自然態度は誤解もありうかと思ふが、現象学の範囲で Heidegger は日常性を手がゝりとしてゐるが、この「日常性」が自然的態度と同じ様に考へる事もあり得ようかさうはゆかぬ。

例へば、日常生活態度の中に此処に学問的態度を考へたとき日常生活態度が自然的態度と同一ならば学問的態度は自然的態度ではなくなるが、Husserl の云ふのは之も包むのである。つまり同次的に等しいのではなく、自然的態度は人間的態度と等しいのである。さうでなければ Kant 派と同じになつてしまふ。例へば Neo-Kant 学派の態度は自然的態度を免れないのであるが、今此処ではそれを避けて、現象学的の態度を取るのである。つまり Entmenschlichung をするのである。

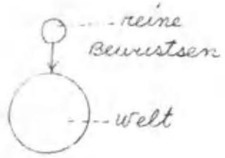
但し之は人間の他の種々の態度と異り、それ等と相並ぶ所の一つの特殊な態度を云ふのであらうが、之について Husserl は自ら発表したものゝ中

には不明であるが、幸運に一昨年の Fink (Bildbewusstsein の研究の懸賞論文) に当選した、その論文 Vergegenwärtigung und Bild の Einleitung 及びその Essay の中にある。Jahrbuch XI 及一つは Die Phänomenologische Philosophie Ed. Husserl's in der gegenwärtigen Kritik. K-st XXXVIII. この方はその Einleitung で Husserl 自身が自分の見解と同じだと証してゐる。) が Husserl を代弁して明かに規定してゐる様に Husserl の所謂自然的態度は Heidegger の日常態度でない事は勿論、凡そ何等(特定的)主題的な態度を意味せず一般に何等態度と云はるべきものでない。むしろあらゆる人間の態度は原理的に自然的態度の中に止つてゐる。則ち所謂自然的態度はあらゆる態度を貫きそれを担つてゐるものであり、あらゆる態度が互に排斥し合ひ、若しくは互に交錯し合ふ所の地盤であり、あらゆる態度に対し、それ等を可能にするものとしての Glaubsetzung (予措前提) である。自然態度は人間の本性に属し、人間の本質を構成するものであり、人間が一つの存在者として全世界の中に置かれてゐる事であり、又云ひかへれば、世界化された主観性の態度であり、又

世界に対する人間のあらゆるその様相に於ける自然的存在である。故にまたかゝる自然的態度に伴なるものは世界存在を stätig（恒久的）に潜在的に前提してゐる と云ふのである。則ち Husserl の所謂自然的態度の一般的指定である。Husserl の以上の様な見地から見れば然水の伝統的認識論は総てかゝる自然的態度を未だ脱却してゐないものであり、従って例へば Kant 流的の批判的の哲学的認識態度も自然態度からそれと異った他への転換を意味するのではなく、同じ自然的態度の中の特殊の態度に他ならぬと云へる。Fink が批判哲学の der mundane Charakter（世界的性格、世界に閉じ込められた性格）と云ってゐるのは正にその事を指してゐるのである。故に Fink は次の如く云ふ。則ち批判主義がその根本問題を如何に種々に表現してもそれはすべてあらゆる存在者の前提であるところの意味領域に対する問の Modifikation（変様）であるに止る。この意味領域（規定的、根底的領域）が哲学的問題設定の主題的領域であり、その哲学的問の計画は理論的対象性として Gegebenheit（所與性）に於て存在者の経験を始めて可能ならしめる世界の意味的先天的形

式への上昇であると云ってゐる。

例へば第一の客観主義的態度の場合も同様で Begriff の System が理論的場所である。その System は相互関係を以って世界を網の様に包んでゐる。云はゞ網の様になってゐる System に上昇することが transzendentalisieren と云へる。而して Begriff は Form と Materie を持つが結局 Form にしても世界をはなれられぬ。所で Phänomenologie ではそれを離れ、之から世界を Schöpfen せんとする。そこに transzendental の意味がある。Pänomenologie では自己で自己の意識を意識せんとするのである。かゝる事の為めにこの説を説くときには他を自己と同一の地盤に立たしめねばならぬ。それでなければ分らないとした。則ち現象学的立場から見れば批判主義は経験の実証性を超越すると共にあらゆる存在者に遡行し存在をして存在者たらしめる意味領域 —— 先天的世界形式或は主観主義的批判哲学の場合は之と結びつく先見的統覚への遡行を企てるとは云へ、原理的にはかゝる問題設定は世界の地盤の上に止ると云へる。この意味に



於て批判主義の世界問題の解釈は正に先見的世界形式へ潜行する者に依つて世界に *immanent* であると云はなければならぬ。かくして我々は先の第一にのべた様な *Rickert* の先見的主観の客観的もへ力を妥へた *Bauch* の主観も *Phänomenologie* の立場からすれば先見的世界形式として世界に内在的であり、制約者として被制約者たる経験対象を同時に制約して共に世界を構成するに止ると云へるであらう。則ち総じて批判主義はそれが客観主義にせよ、主観主義にせよ、客観的妥当的認識の可能問題に先見的世界形式を要求し終極に於てそれを出でぬ。それを超越して更にその可能を問題としない。然って又かゝる形式で作られる世界そのものゝ可能根拠を徹底的の意味で問題としてゐないで依然として自然的態度の中の一態度として世界存在の一般的構成に生きる所の現象学的に所謂 独断的哲学である事は上述の如くでなければならぬ。然らば *Phänomenologie* の認識論は如何に前者と異るか。*reine Phänomenologie* が同じく客観的妥当的認識の可能の制約又は他方から云へば存在者の経験的所與の可能の制約

の基礎づけを問題にする点で批判哲学と問題設定を同じくする如き外観にも不拘、上述の如く批判哲学は可能哲学の先天的世界形式に上り、更に斯様なものゝ可能の制約を問題とせぬに対して *reine Phänomenologie* はかゝる先天的世界形式をも含めて世界全体の可能の制約を問題とする。則ち *Fink* の言に依れば *Phänomenologie* は世界の根源を問題として世界をその存在の窮極の根拠からあらゆるその実在的観念的規定を含めて、解明せんとする哲学（*reines Bewustsein* の *erkennen* 則ち *Phänomenologie*）とあらゆる世界的認識一般の学問との間に *Begründung* の関係が成立する。則ちこの意味で認識論である。（自己反省の要求で窮極のものは *Idee* としては考へられても更に意識の反省によつて求めてゆかうとするのである。）*Husserl* 的の *Phänomenologie* の特説出来る *Begriff* はされば *Reduktion*, *Konstitution* で、それによつて與へられるのである。前者は方法で後者は対象である。

然らば *Phänomenologie* の目的乃至問題が前述の如きものとせばかゝる *Aufgabe* の遂行を特色づけるものは何か。*Phän* にとれば それは

Reduktion（還元）と Konstitution（規制）とである。（Konstitution は Konstruktion と歌語をまちがひやすい）この二つは Phänomenologie を支へる二大支柱で前者は Phänomenologie の方法であり、后者は前者に依って現はされる。Phänomenologie の対象なりと云へる。この Konstitution を Fink 等は mundan な意ありとして Produktion, Kreation と大袈裟な語で表はしてゐる。でこゝで注意すべきは Husserl は今までのものでReduktion はよく説いてゐるが Konstitution は開展はしてゐない。Idee 等で Konstitution と云ふのは実は Konstitution をとくのでなく先廻して后に説くべきものを先にといてゐると云ひ、之は則ち Intentionalität（志向性）の考へ方である。勿論之は志向性で一貫して一つのものでなければならぬ（バラバラならその統一者を要す）それに三段階を考へる。

第一、Psychologisch の場合 —— 我々の mundan なる世界内の普通の志向性（I see a table）がはたらいてゐる。この場合志向性はするものとされるものゝ間に外部的にはたらく。

志向性は外部からの刺戟によるから之は passive

Int を云ふ。之は Reduktion 以前のものなり。

第二には Reduktion 后第一歩として考へらる。でこの意からして rein Bewustsein のもの、Vernunft ので考へらる。之はよく云はれる様に Bewustsein の内部で Cogitatio と Cogitatur の関係である。一般には Noesis と Noema の関係として考へられてゐる志向性で之は Idee などで説き Akt として説いてゐるもので元来この志向性は未だいきなり、外観的に aktiv とは考へられぬ。つまり unbestimmte Intentionalität であり、だが Korrelation として考へるのである。然し之は Kontituieren しない。之が今まで説かれた。

Cogitatio ⇄ Cogit
Noesis - Noema

第三になって Intentionalität の Urgrund に於けるもの則ち aktiv な Konstituieren するものとして考へられる。Noesis の Urgrund に我を我とする Konstituieren が行はれ之から出発する。つまり時間意識の実行性から出発する。故に世界の Kreation, Produktion とは Urgrund からのものである事が云へる。扨って第二の Noesis と Noema の関係（Akt）はそれ丈で Konstitution

を説いてゐるのではない。

で、支柱として世界から Ursprung に向つて Reduktion されそこに最后のもの Konstitution が出されるのである、としたのである。Husserl に依ると Phänomenologie は先見的主観の学的自覚である。即ち事実から本質必然性、則ち根源的 logos へ向ふ先見的主観の自覚なり。かゝる自覚によれば総ての客観的存在すべての客観的真理は上の先見的主観性の中にその存在根拠、認識根拠を有す。そして先見的主観性そのものに関する真理あれば之も先見的主観性そのものゝ中にその根拠を持たねばならぬ。換言すればこの先見的主観性が systematisch allgemein に自覚し、反省するとき一切の客観的存在乃至一切の客観的真理はみな自己自身に於て Konstituieren されてゐるのを見出すのである。客観的なものは先見的主観性に本質的に属するところの志向性の綜合的統一に他ならぬ。而して必然的存在であるところの我(Ego)に於て、無数の他の ego(我)が Konstituieren される事によつて右の綜合的統一は自分としての我及び他の諸々の我が夫々相互に交渉(又は交

通)する事によつて成立つ所の All-gemeinschaft (全体の共同性)即ち Intersubjektivität (共同主観性又は間主観性主観の間をつなく)に結びつけられてある。則ちこの綜合的統一はこの Gemeinschaft 則ちこの Intersubjektivität に本然的に属する志向的綜合統一である。Phänomenologie の transzendentale Subjektivität は Kant の Bewstsein überhaupt とちがひ反省からすれば自己の transzendentale Subjektivität に支配されて Objekt になる。之は Bewstsein überhaupt に基くのでなく、すべての人のみとめる Objektivität ではなく、すべての人によつて Objekt としてはじめて Objektivität を確立する。こゝに Phänomenologische Monadologie がはじまる。で上述のは結局 egologisch で多くの Ego の統一を要する。之が Intersubjektivität である。この導出には多くの意見批評あり、その不可能を云ふ人もある。

いづれにせよ ego に対する他人は経験的には、はじめから予想されるが、Phänomenologie では ego によつて総ての ego が Konstituieren されて、その Konstituieren として Objektivität となすと

する)。又一面に於てこの先天的共同主観性に関する心理は ego の場合と同じくやはり絶体的存在たる共同的主観性そのものに根拠を有す。つまり Husserl によるとすべての Wahrheit の最后の Begründung は絶対的普遍的自覚の一部なりと云ふ事になる。則ち Phänomenologie に於ては transzendentale Reduktion を以って自覚をはじめ、この自覚により自分の先見的我を絶対的に把握する。かく把握されし后、我々のこの絶対的 Ego をこの主観的領域として一切の他の reine Phänomenologie の反省を有する。則ち我々は純粋に我々自己の中に見出せるものについてのみにつき考へ、かくて根源的に我々に固有なもの則ち我々自身と不可離のものとして Konstituieren されるもの、則ち noesis が不可分的の作用的側面と之に基いて我々の中に前者(作用的側面)と階を異にするものとして Konstituieren されるもの、則ち実在的(real)又は Ideal なものとして Konstituieren されるもの、則ち世界のあらゆる対象的側面のものである。則ち対象的側面と前者とを区別し之等総てを受動的なる現象学的反省の主題とし夫々の対象の主観的 Konstitution を明かにせんとす

る。かく自分でやってゐる反省が Phän をやってゐるのだが、かくてなる Phänomenologie も従として ideal なもので、之も Urgrund まで徹底的に反省するべきである。Subjektivismus としては徹底してゐるが、この考へ方は Urgrund からの Konstitution と云ふが、Gegenstand が、Akt によってすべて Konstituieren されるかと云ふとやはり残るものがある。で Husserl はこの点は正直に考へてこゝに問題がある、先には Objektivismus に徹して困難に陥り、今 Subjektivität も困難になる。結局のこりの metaphysisch にすゝまねばならなくなった。

昭和十一年　月　日印刷発行

編輯発行責任者　金森　豊
東京本郷本郷六〇九

印刷所　東京プリント刊行会印刷部
東京、本郷、赤門前

発行所
東京プリント刊行會
東京市本郷区帝大赤門前

(¥ 0.70)

特 226

108

終